

特別講演Ⅱ

【会 場】メインホール

2016 年 11 月 19 日（土） 13：30～15：00

読み書き障害の家族性の問題と支援

～読みの学習困難の早期発見と予防 グローバルな視点から～

講師 Heikki Lyytinen

UNESCO professor/UNITWIN chair on Inclusive Literacy Learning for All

University of Jyväskylä & Niilo Mäki Institute, Jyväskylä, Finland

司会者 牟田 悦子

成蹊大学

※文字通訳・同時通訳あり



【趣旨】

はじめに、ディスレクシアについてのユヴァスキュラ縦断研究（Jyväskylä longitudinal study of Dyslexia: JLD）のハイライトを概観します。ユヴァスキュラ縦断研究は、ディスレクシアを長期的に予測する研究です。発達のごく初期から思春期までの縦断的なデータが収集されています。

つぎに、読みの学習につまずくリスクのある子どもに対して私たちが行っている支援の試みに関連させて、その理論的枠組みと経験的な結果について紹介します。ユヴァスキュラ縦断研究の結果、最も早期に読みの獲得に関連する困難さを有意に予測する因子は、すでに生後3～5日目にみられる、語音に対する脳の反応にその基盤があることがわかっています。読みの学習がはじまる何年も前に、簡単な方法で、将来読みの学習の困難に直面するであろう子どもを非常に正確に予測することが可能です。

最初のトレーニングの段階でのダイナミックなアセスメントを通して、支援のニーズを正確に適切に予測することが可能です。この最初のトレーニングの段階は、話しことばの要素と書きことばの要素を結びつける学習という、基本的な読みのスキルの学習に欠かせないものです。ダイナミックなアセスメントは、本来の目的（スキルのトレーニング）を達成するための学習と統合して行うことができます。このような方法を用いることによって、子どもに不必要な負担をかけなくて済みます。直接的でない方法で行われる、多くの場合あまり信頼性のない、あまり妥当性のない予測因子によるアセスメントを行わなくて済むのです。

私たちの行っているグラフォゲーム（Graphogame: GG）のテクノロジーを使うことによって、リスクのある子どもたちは、失敗に直面したり失敗を経験したりする前に、読みのスキルの学習の支援を受けることができます。グラフォゲーム（GG）によるトレーニングでは、コンピュータゲームのかたちで、話しことばの要素と書きことばの要素のつながりを繰り返し提示して記憶させる課題を行います（graphogame.info を参照）。先に述べたように、これは単に読みの問題を解決するために役立つだけでなく、同時に、読みの学習に必要な時間を正確に予測するためのアセスメントにもなるのです。

このような目的を達成するという事は、各言語に特有の内容に応じて実施するために、各言語にとって最適なフォニックスによる学習（発音と綴りの関係の学習）を行う必要があるということです。私たちはこれを出発点にして、研究の枠組みを超えてゲームを利用することに先立ち、効果について関連するグローバルな研究を行ってきました。フィンランドでは、効果が検証されたことにより、「グラフォゲーム」サービスが公的な資金を得て設立され一般公開されました。こんにちフィンランドでは、2007 年以来、初期学習につまずきのある 20 万人以上の子どもたちが、グラフォゲームによるトレーニングの恩恵を受けています。1 日あたりでは、2 万人以上の子どもがゲームで遊んでいます。多くは、流暢さのトレーニングのゲームに集中しています。

私たちの行ったアフリカおよびアジアでの興味深い研究成果を紹介するつもりです。現在、4 つの大陸、20 か国以上で調査を行っています。非アルファベット圏の書字環境で同じ原理のトレーニング方法を適用する試みも行っています。また、イギリスの共同研究者とともに行った、2 種類の英語版グラフォゲームの効果研究結果も最近報告しました。報告では、読み書きスキルの改善のエビデンスが示されています。

最近新たに力を入れているのは、読みの最終段階—文字で書かれた世界から意味を効率よく媒介することの学習—to 焦点をあてた研究です。

【略歴】

ヘイッキ リュウティネン

ユネスコ教授 ユネスコ講座「すべての人のためのインクルーシブな読み書き学習」(2015–2019)

ユヴァスキュラ大学名誉教授（発達神経心理学）

欧州科学技術協力機構（EU-COST）A8「人間発達におけるバリアとしての学習障害」研究リーダー（1994–1998）

センターオブエクセレンス「人間発達とそのリスク因子」（フィンランドアカデミー助成）共同研究リーダー（1997–2006）

センターオブエクセレンス「学習と意欲」（フィンランドアカデミー助成）共同研究リーダー（2006–2011）

ディスレクシアに関するユヴァスキュラ縦断研究（JLD）プロジェクトリーダー（1993–）JLD-dyslexia.info 参照

ユヴァスキュラ大学副学長（1997–2000）

ユヴァスキュラ大学アゴラ人間科学技術センター理事長

ニーロ・マキ財団（www.nmi.fi/front-page）理事長

フィンランド科学と文学アカデミー会員（2003–）

論文・著書 300 以上（heikki.lyytinen.info 参照）

最近の研究領域：ディスレクシア、読みの習得、読み困難やディスレクシアのリスクのある子どものためのデジタル学習環境（grapholearn.info 参照）